

P1-634 閉経周辺期および両側卵巣摘出後女性におけるホットフラッシュとサイトカインに関する検討徳島大¹, 徳島県立中央病院²安井敏之¹, 富田純子¹, 宮谷友香¹, 山田正代¹, 上村浩一¹, 前川正彦², 苛原 稔¹

【目的】閉経周辺期にはサイトカインの変化がみられ、内分泌学的因子や精神神経症状の関与が報告されている。一方、一部のサイトカインは血管拡張と関連することが報告されている。今回我々は、血管運動神経症状であるホットフラッシュとサイトカインとの関連について検討した。【方法】倫理委員会の承認を得て、炎症性疾患を有さない閉経周辺期の女性129例および両側卵巣摘出術後患者50例を対象に、血清中のサイトカインの測定を行った。ホットフラッシュの程度はFDAの基準により、mild, moderate, severeに分類した。血中サイトカイン濃度はサイトカイン一括測定システムにより、17種類を同時に測定した。【成績】17種類のサイトカインのうち、ホットフラッシュと有意な関連がみられたのはinterleukin (IL)-8とmacrophage inflammatory protein(MIP)-1 β であった。severeなホットフラッシュを有する女性のIL-8は平均101.5pg/mlであり、mild(平均26.7pg/ml), moderate(平均54.4pg/ml)なホットフラッシュを有する女性およびホットフラッシュがみられない女性(平均7.6pg/ml)に比べて有意に($p<0.01$)高かった。両側卵巣摘出後にsevereなホットフラッシュがみられた女性のIL-8も、他の群に比べて有意に($p<0.001$)高かった。また、MIP-1 β もsevereなホットフラッシュを有する女性では、他の群に比べて有意に($p<0.0001$)高く、両側卵巣摘出後の場合も同様であった。【結論】severeなホットフラッシュを有する女性では血清中IL-8およびMIP-1 β は高く、ホットフラッシュにおける血管拡張と関連する可能性が示された。

P1-635 婦人科腹式手術における卵巣機能温存術の有無によるE2およびFSHの推移

東京女子医大

武者稚枝子, 尾上佳子, 石谷 健, 岡野浩哉, 太田博明

【目的】有経者に対する婦人科手術においては、患者の意向を重視した上で出来得る限り卵巣機能を温存させる。しかし、卵巣機能を温存したにもかかわらず、術後、更年期様症状を呈する症例も多い。今回、当院で婦人科手術を受けた有経女性40例について術前にインフォームド・コンセントを得て、術後6ヵ月までのホルモン状態につき検討したので報告する。【方法】婦人科良性疾患および子宮頸部上皮内癌にて開腹手術を受けた有経婦人40名。このうち、A群10名(平均年齢47.3 \pm 3.7歳)は両側付属器切除術を施行し、B群30名(平均年齢45.7 \pm 2.5歳)は卵巣機能を温存した。この患者について術前、術後7日目、術後1ヵ月目、術後3ヵ月目、術後6ヵ月目に採血を行い、女性ホルモンを計測した。【成績】A群のE2値は術後7日目には10PG/ML以下となりその後も一定であった。FSH値は術後1ヵ月まで増加した後は60mIU/ml以上を呈し、その後ほぼ一定であった。B群のE2値は術後7日目に一度減少したあと術後1ヵ月目には増加し、再び術後3ヵ月目に減少したあと術後6ヵ月目には増加する傾向がみられた。FSH値もE2値に対応するように、術後7日目には増加し、術後1ヵ月目には低下、術後3ヵ月目に再び増加したのち術後6ヵ月目には低下する傾向を認めた。【結論】卵巣機能温存手術の場合でも半年間、特に術後7日目と術後3ヵ月目には、一時的に低エストロゲン状態になることがあることが判明した。術前の患者への説明に卵巣を温存した場合でも短期的に更年期症状が出現することがあること、しかし一時的なものであるため治療を要する場合でも短期間である可能性が高いことを伝えることで患者の不安を軽減させることができるものと思われる。

P1-636 性同一性障害におけるホルモン療法の血管への作用：血圧脈波検査による評価岡山大学¹, 岡山大学保健学科²安達美和¹, 中塚幹也², 佐々木愛子¹, 野口聡一¹, 鎌田泰彦¹, Hao Lin¹, 清水恵子¹, 平松祐司¹

【目的】性同一性障害のうちMale to Female (MTF)症例ではエストロゲンが、Female to Male (FTM)症例ではアンドロゲンによる治療が行われる。性ホルモンの血管への作用は知られているが、性同一性障害における血管障害の研究は少ない。今回、血圧脈波測定により、性同一性障害におけるホルモン療法の影響を検討した。【方法】当院ジェンダークリニックを受診した性同一性障害166例(MTF 87例, FTM 79例)を対象とし、同意のもと血圧脈波検査を施行した。平均年齢は、MTF症例で26.8歳、FTM症例で35.3歳であった。MTF症例のうち69例でホルモン療法が施行され期間は2.2 \pm 2.4 (mean \pm S.D.)年であった。また、FTM症例のうち28例でホルモン療法が施行され期間は3.4 \pm 3.0年であった。MTF症例、FTM症例ともホルモン療法施行群と非施行群との間で、年齢、身長、体重に有意差はなかった。【成績】MTF症例では、ホルモン療法の有無で、収縮期血圧、動脈閉塞の指標であるAnkle Brachial Index (ABI)値、動脈壁の硬さの指標である脈波伝播速度(PWV)、血管内皮障害の指標であるAugmentation Index (AI)に有意差は見られなかった。FTM症例では、ホルモン療法施行群で、非施行群に比較して収縮期血圧、拡張期血圧は有意に高値であった。また、ABI値やAI値には有意差は見られなかったが、PWV値は、ホルモン療法施行群で有意に高値(各1,216.9 \pm 171.6cm/secと1,102.1 \pm 175.3cm/sec, $p<0.01$)であった。【結論】MTF症例では、今回、観察した期間のホルモン療法では、血圧脈波検査上の異常は見られなかった。しかし、FTM症例のホルモン療法では、病的ではないが動脈壁の硬化が見られたため、生活習慣の改善と定期検診が必要である。